

就労している不妊治療経験者の 年次休暇取得状況と両立困難感

山田典子¹⁾， 佐藤高輝²⁾， 山崎貞一郎³⁾， 前田恵理³⁾

- 1) 日本赤十字秋田看護大学 2) NPO法人フォレシア
3) 秋田大学大学院医学系研究科衛生学・公衆衛生学講座

Email: yamada@rcakita.ac.jp

背景

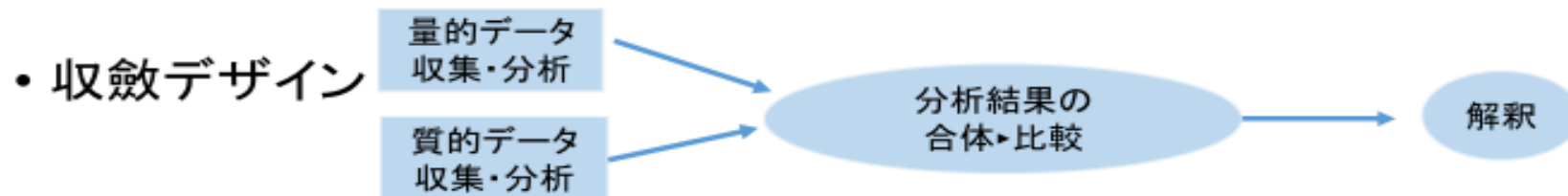
- 働きながら不妊治療を受ける労働者は増加傾向にあると考えられ、厚労省(2020)の調査では両立困難から離職する者も16%にのぼる。不妊治療経験者と非経験者の相互理解を深め、不妊治療と両立しやすい労働環境を整える必要がある。そこで本研究では、治療経験のない労働者も含めた労働環境への認識と 不妊治療経験者の両立困難感について調査を行った。
- 佐藤(2021)らの先行研究より、働きながら不妊治療を受ける労働者は増加傾向にあり、不妊治療経験者は治療のために仕事を休みづらいつと感じていた。本研究では、不妊治療経験者の割合と年次休暇取得状況および「休みづらさ」の本音をもとに、改善策を検討する。

方法

A県内の公務員3,378人（男性2,701人、女性677人）を対象に、2021年2月8日から15日までイントラネット上で無記名式質問紙調査を実施し、不妊治療経験者に対して、両立困難感、不妊治療職場開示の有無、勤務形態の変更を考えた経験等について尋ね、自由記述を分析対象とした。

混合研究法を用いた理由

- ・ 不妊治療と仕事の両立において一夫婦ごとに異なる体験があり、どのくらいの割合の公務員が不妊治療をし、このプロセスにおいて何を体験したかを明らかにするために混合研究法を選択した。



- ・ 倫理的配慮として、調査者よりデータの二次分析の承諾を受け、A大学研究倫理審査の承認を得て二次利用した。個人や組織の特定に繋がらないよう配慮した。

回答者の属性

	治療歴なし (n = 1182)		治療歴あり (n = 172)	
	将来可能性あり (n = 71)		治療中 (n = 26)	
	今後も行わない (n = 824)		経験がある (n = 146)	
	分からない (n = 287)			
性別	男性, n (%)	896 (75.8)	119 (69.2)	
年齢	20-29歳, n (%)	232 (19.6)	9 (5.2)	
	30-39歳, n (%)	218 (18.4)	48 (27.9)	
	40-49歳, n (%)	294 (24.9)	58 (33.7)	
	50-59歳, n (%)	359 (30.4)	48 (27.9)	
	60-64歳, n (%)	79 (6.7)	9 (5.2)	
雇用形態	管理職, n (%)	479 (40.5)	80 (46.5)	
	一般職員, n (%)	654 (55.3)	85 (49.4)	
	その他, n (%)	49 (4.2)	7 (4.1)	

回答者1,354人(回収率40%)のうち、不妊治療経験者は172名(13%)であった。
回答者は男性が多く、管理職が半数弱であった。
治療歴あり群で30代・40代の回答者が多かった。

出典:佐藤、山崎、前田、山田(2021)。不妊治療経験の有無による労働環境に対する認識の差異。日本公衆衛生学会総会。Web抄録集205頁

結果

不妊治療経験者の自由記述より

127名(74%)は不妊治療について職場に伝えていなかった。
女性30名、男性8名の自由記述より、

- ・「当事者になって初めて知った大変さと孤独」
- ・「時間とお金、体力を消費する不妊治療」
- ・「心身共に非常に負担が大きい不妊治療への理解が乏しい上司」
- ・「専門医が少なく激混みの病院で十分なには望めない」
- ・「仕事と治療の両立ができなければ諦めるという選択肢しかない」

のカテゴリが抽出された。

両立困難感の背景因子 (多重ロジスティック回帰分析 n = 144)

	Odds Ratio	P	95%信頼区間	
休みやすさ (1段階毎)	0.22	<0.001	0.11	0.43
女性	9.99	<0.001	3.37	29.59
管理職	1.13	0.80	0.45	2.83
治療開始時年齢 (5歳階級毎)	1.09	0.68	0.71	1.69
合計治療期間 (1段階毎)	1.22	0.20	0.90	1.67
通院時間 (1段階毎)	1.62	0.04	1.02	2.58
現在治療中	1.26	0.72	0.36	4.46
体外受精・顕微授精	1.90	0.23	0.66	5.43
不妊治療のために休暇未取得	1.41	0.51	0.51	3.92
治療を職場に伝達	0.61	0.37	0.21	1.77

治療状況や雇用区分・性別を考慮しても休みやすい職場であれば両立困難感は少ない
女性であること、通院時間が長いことは両立困難感につながる

出典:佐藤、山崎、前田、山田(2021)。不妊治療経験の有無による労働環境に対する認識の差異。日本公衆衛生学会総会。Web抄録集205頁

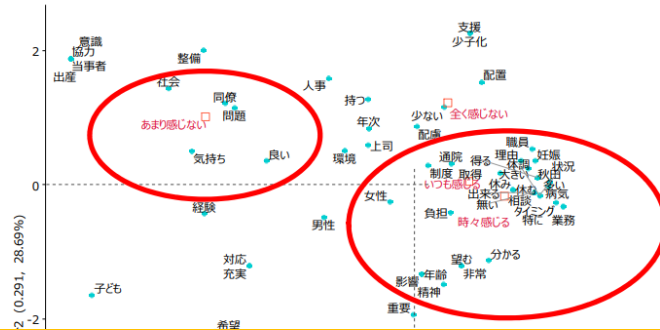
量的研究から、回答者1,354人(回収率40%)のうち
不妊治療経験者は172名(13%)であった。
治療経験者のうち、85名(49%)が仕事と治療の両立困難を感じており、困難感のあった38%が勤務形態の変更(退職・転職等)を考えていた。127名(74%)は不妊治療について職場に伝えていなかった。

当事者になって初めて知った大変さと孤独

- ・体外受精等を行う段階の不妊治療の場合には、肉体的、精神的、金銭的に相当の負担があるものと認識しております。また、首都圏と地方では治療を受けられる病院の数に圧倒的な差がある・・・
- ・私自身も、恥ずかしながら自分が当事者になってはじめてその大変さ、孤独を少し理解することができました。運良く私たちは治療を始めて1年余りで授かることができました。それでも落ち込むことはたまにあったので、長く辛い治療を続けておられる方のご心労はいかばかりかと思います。もしかしたら、近くにも不妊治療と仕事の両立に苦しんでいる方がいるかもしれない、もしいるのならば応援の気持ちを伝えたいと思うのですが、極めてプライベートな領域であるので、直接その気持ちを伝えることは難しいのが現状です。

心身共に非常に負担が大きい
不妊治療への理解が乏しい上司

- ・不妊治療の病院の現状として、検査を一つするだけでも、半日はかかります。それだけ、指定病院は混んでおり、平日に行っても2時間待ちは当たり前です。土曜日はもっと混みます。午前に行っても診察は午後になることもあります。
- ・通院するにしても、身体の調子やタイミングで左右されるため、事前に予定が立てられない・当日急遽通院することもあります。
- ・不妊治療のための通院で年次を取得しやすい職場環境なのであれば、自分は不妊治療を公表しても構わないと思っています。ですが、現状は公表したとしても理解が得られ年次が取得しやすくなるとは思えません。



専門医が少なく
激混みの病院で十分なICは望めない

- ・本人ががんばったからといってかならずしも願いが叶うものでもないことや、本人自体もいつ、どのタイミングでなにをすべきか、直前までわからないことが多いことも、……。
- ・仕事上の時間の融通が付くこと(休みやすい・仕事の調整ができる等)も当然必要だが、対象者への懇切丁寧な説明・対応ができる施設を増やすことも必要だと思う。そのことにより、病院へ行く時間についても融通がきくようになると思う。
- ・毎朝の基礎体温で排卵予定日を計算して受診する必要があるし、直前に年次休暇を申請しなければならず、仕事の調整が大変で毎月のストレスだった。

- ・県内で不妊治療を行うにあたっては認定病院に限られるため、移動時間も含めた長時間・期間での休暇時間の取得が必要です。治療は女性のタイミングに合わせた休暇取得にならざるを得ず、かつ本格的な治療が始まると注射等で通院回数も増えるため、職場の上司や同僚からの理解＆休暇取得しやすい環境づくりが必要不可欠と感じます。
- ・毎日通院が必要だったり、心身共に非常に負担が大きいということを真に理解してくれる上司は少ない。
- ・上司には伝えることが出来ても、異性の同僚（特に独身の方）には伝えにくく、理解を得るのは難しい。
- ・上司が男性で治療を伝えたくない気持ちが強く、一人で抱えることも辛かったのも、職場にセクハラ相談員のように男女の相談員を配置すればいいと思う。

仕事と治療の両立ができなければ諦めるという選択肢しかない

- ・普段休みは取りやすいが、外せない仕事があれば仕事を優先してしまい、治療のタイミングを逃してしまうことはあった。また、この日に来てくださいと病院から指定されることもあるので治療自体がストレスになったり、不妊治療に特化した病院は混んでいるので時間もかかり体力的にも疲れてしまう。内服薬や注射等で体調不良になり、多少仕事がついときもあるがなるべく影響がないようにしたいとは思いう反面、うまくいかないこともある。
- ・1か月に何回も通院しないといけなく、休む理由を「通院のため」としか伝えてきませんでした。今のところ何の病気かなど問われていないが、今後のことを考えるといずれ伝えなければいけないのかなと今から憂鬱です。職場が不妊治療で休むことを良しとしているのか分からないためです。
- ・不妊治療は時間もお金もかかるので、途中でやめてしまいました。

混合研究法への示唆

- 混合研究法を用いたことで、治療状況や雇用区分・性別を考慮しても、女性であること、通院時間が長いことは両立困難感につながる。
- 「時間とお金、体力を消費する不妊治療」の「当事者になって初めて知った大変さと孤独」は、「心身共に非常に負担が大きい不妊治療への理解が乏しい上司」もあり、さらに「専門医が少なく激混みの病院で十分なICは望めない」なか、「仕事と治療の両立ができなければ諦めるという選択肢しかない」と、追い詰められていた。
- 不妊治療には繊細な配慮が必要で、治療中の女性は職場の男性上司に相談しづらいことも明らかになった。職場全体で不妊治療への知識と理解を深め、改善していく上での要点が示唆された。

参考文献

佐藤高輝、山崎貞一郎、前田理恵、山田典子（2021）．不妊治療経験の有無による労働環境に対する認識の差異．日本公衆衛生学会総会．Web抄録集205頁

謝辞

本研究は秋田県 コロナ時代のニューノーマルへの対応や新たなビジネスに関するFS事業の助成を受けて実施されました。本研究にご協力くださいました、明石陽子様（元秋田県産業労働部）、有明順様（元あきた活性化センター）に心より御礼申し上げます。